

## エルガー：エニグマ変奏曲 Op.36

「エニグマ=謎」の名をもつこの変奏曲は、近代イギリスの作曲家、エドワード・エルガー（1857-1934）が書いた最初の本格的なオーケストラ曲である。

イギリス、謎解きといえば、エルガーと同世代のコナン・ドイル（1859-1930）が生んだ名探偵シャーロック・ホームズを思い出す人もいるだろう。相手の表情や仕草から職業や性格まで読み取ってしまうホームズの間観察はみごとなものだが、エルガーもなかなかの観察力の持ち主だったようだ。というのも、エルガーはこの作品で、14の変奏にイニシャルやニックネームを与え、特定の人物を音楽で描写したのである。なかには「\*\*\*」と記された変奏もあった。

エルガーのヒントにより大部分は解明されているが、謎が完全に解けたわけではない。さらにエルガーは「全曲を通じてもう一つの大きな主題があるが、実際には演奏されない」というミステリアスな言葉も残しており、謎は深まるばかりである。

作曲当時、エルガーはまだ国外でほとんど無名であったが、1899年に曲が完成すると、親友のイエーガー（第9変奏参照）らに背中を押されて、ワーグナーなどの作品初演で知られるドイツの名指揮者、ハンス・リヒターのもとに楽譜を送った。リヒターは作品を高く評価し、同年6月19日、ロンドンで初演した。エルガーはその後、イエーガーの勧めで終曲を拡大した。

いくぶんメランコリックな自作主題をもとに、14の性格的変奏（自由度の高い変奏）が交代していく。主題から第1変奏へは切れ目なく続く。（以下、「」はエルガーの言葉どおり。）

・第1変奏 C.A.E キャロライン・アリス・エルガー。エルガーの愛妻。「ロマンティックで繊細なインスピレーション。」

・第2変奏 H.D.S-P ヒュー・デーヴィッド・ステュアート・パウエル。「アマチュア・ピアニスト。16分音符でユーモラスに戯画化される。」

・第3変奏 R.B.T. リチャード・バクスター・タウンゼント。劇団の役者。「低い声だが時々ソプラノの声に飛び移る。」ワルツ風の音楽。

・第4変奏 W.M.B ウィリアム・ミース・ベイカー。「あわただしくドアをボタンと閉めて出ていく。」ティンパニを伴った3拍子の活気ある音楽。

・第5変奏 R.P.A. リチャード・ペンローズ・アーノルド。著名な詩人の息子。「真面目な会話の間にユーモラスで機知に富んだ話が挟まれる。」そのまま次の変奏に続く。

・第6変奏 Ysobel イザベル・フィットン。アマチュアのヴィオラ奏者。

・第7変奏 Troyte アーサー・トロイト・グリフィス。「荒々しい雰囲気はただの冗談だ。」ティンパニの荒々しいリズムで開始される。

・第8変奏 W.N. ウィニフレッド・ノーブリー。18世紀に建てられた家に住む婦人。「特徴ある笑い方。」

・第9変奏 Nimrod オーギュスト・ヨハネス・イエーガー。エルガーの親友。ニックネームの「ニムロート」は「イエーガー=狩人」を意味するドイツ語。「彼がベートーヴェンについて雄弁に語る時の記録。」全曲中もっとも有名である。

・第10変奏 Dorabella ドーラ・ペニー。「ダンスのような軽やかさ。」エルガー夫妻が可愛がっていた近所の少女。

・第11変奏 G.R.S. ジョージ・ロバートソン・シンクレア。オルガニスト。「(愛犬の)ブルドック、ダンが河で犬かきをし、吠えている。」

・第12変奏 B.G.N. ベイジル・G.ネヴィンソン。アマチュアのチェロ奏者。「真面目で献身的な友人。」チェロの独奏で始まる。

・第13変奏 \*\*\* 「ロマンス」とある。エルガーは音楽家仲間の「レディー・メアリー・ライゴン」と明かしたが、実際はエルガーが想いを寄せる別の女性とも言われる。

・第14変奏 E.D.U. エルガー自身。「作曲家が意図したものを示すために。」エドゥは妻アリスが呼んだエルガーの愛称。アリスやニムロート（イエーガー）の主題も回想され、愛する人々への熱い思いがフル・オーケストラで語られる。

遠山菜穂美

楽器編成：フルート2（ピッコロ持ち替え1）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、スネアドラム、バスドラム、トライアングル、シンバル、オルガン、弦五部 ※スコア上の表記

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。